南里嘉十を知っていますか？

～アメリカ・フィラデルフィア美術館に残る有田焼～

南里嘉十製作の花瓶
（フィラデルフィア美術館蔵）
（Philadelphia Museum of Art: The General Hector Tyndale Memorial Collection, 1897）

昨年のことでした。長崎県佐々町に住む南里ミツエさんという方から電話がありました。「実は私は南里嘉十の子孫ですが、先祖のことをよく知りません。有田に行けば何かわかりますか？」という問い合わせでした。

『肥前陶磁史考』（中島浩氣著）で「南里嘉十」を検索すれば６ページにわたってその名が出てきます。さらにその子「南里平一」は 12 ページにわたります。南里家は明治期に活躍した窯焼きで、平一は三代目の有田町長も務めていますし、これまで作品も幾つか目にする機会もありました。

しかしながら、現在有田町に南里姓の人は住んではおられず、子孫はどこへ行かれたのだろうと思っていたところでしたので、当方が知り得た資料を見ていただこうと思い、ミツエさんの来館を待ちました。昨年、親子で３回ほど来館され、南里家の人々の写真や系図を見せていただきました。

窯焼きとしての南里家は平一の時代で終わったようで、先祖代々の墓碑は有田町白川の墓地内に残るものの、その後、東京へ出た後の南里家は、その子孫が大分県や佐々町などに住居を定め、今に続いているとのことでした。

『肥前陶磁史考』によれば、南里嘉十は白川の窯焼きで、二代嘉十は嘉十焼とよばれた製品を焼いていたこと。製品は丼、鉢、花瓶などで、幕府の御用品を製作したこともあり、明治 13 年（1880）11 月 29 日、63 歳で亡くなっています。

また、香蘭社が所蔵する明治３年（1870）の資料には「白川山」の窯焼き 11 人の中に名を連ねています。実はアメリカ・フィラデルフィア美術館には南里嘉十の花瓶一対が収蔵されています。これは明治９年（1876）にアメリカ独立 100 周年を記念して開催されたフィラデルフィア万国博覧会に出品した製品です。胴部は二重になっていて、外側の胴部に小さな窓を数多くくり抜き、内側の胴部の文様が透かしてみえる花瓶です。高さ約 75 ㎝。明治期の製品によく見られるプラ形、又はデベラグチと称された形で、口縁部が波状になっています。

高台裏面には「肥碟山　南里製」という銘が赤絵具で書かれています。このほかに、「肥碟山　深川製」や、蘭のマークと「年木庵」などの銘を持つ製品もありました。これらは明治９年のフィラデルフィア万博に有田から出品され、その会場でヘクター・ティンデール将軍が購入したもので、その後、ティンデール将軍から美術館へ寄贈され今に至るそうです。また、この折の出品作の一部は英国Ｖ＆Ａ美術館にも収蔵されています。

裏銘

なお、昨年秋、思いをつのらせたミツエさんの娘裕美子さんはひとりで渡米し、先祖の作品との再会を果たしました。顔も知らない、その生涯もよく分からなかった先祖が確かに焼いた製品を実際に見て、触ることができた裕美子さんの喜びはひとしおだったことと思います。

創業 400 年を迎えようとしている有田焼の歴史の中には、有田皿山や有田町に功績のあった人々が数多く埋もれてしまっています。このような人々に再び登場していただき、有田の歴史を語っていただこうと思っています。　（尾﨑　葉子）

季刊 皿山 No.90 夏 2011
有田町歴史民俗資料館・館報

隊で、他の隊より進度が一歩ぬきんでています。辻ごとにチェックポイントを定めて撮影を行い調査する方法や、現在の地図への書き込みの方法などは他の隊の調査の参考にもなっており、今後、調査の集約作業を進めるうえで、さらに大きな力となることが期待されています。

上：窯の辻窯跡付近の天照皇大神宮で解説を受ける隊員
下：調査報告地図。上の写真は⑩付近

桑古場・戸杓隊

戸杓・桑古場・大野・戸矢・古木場とかなりの広範囲を調査することになった桑古場・戸杓隊は松永俊和隊長以下の15名。何から手をつけてよいか最初はとまどっていた隊員ですが、とにかく歩いてみようと動いてみたところ、窯跡、金山跡、番所跡など調べるところが盛りだくさんで、活発に調査が進んでいます。

雨の中を活動する隊員

先日の調査では、なくなっていると思っていた社が、民家の庭に残っていることが分かりました。その家の人にも話を伺うことができ、この御堂は薬師堂であり、このあたりの地名を「薬師の浦」とよぶことなど教えてくださいました。突然の訪問にも関わらず、丁寧に教えて下さりありがとうございました。

活動を始める前は、「内山と違い、外山は開発が進んでいるので昔の道は残っていないだろうから、照合は難しいのではないか」という大方の予想がありました。しかし、道路拡張や新しい道を作ったところはありますが、かなりの道や水路がそのままの形で残っていることが分かりました。

道路拡張自体も、古い道を利用して行っているものが多く、長い歴史の積み重ねで現在に残っていることが分かります。

毎月一回、資料館で隊長会を開き、各隊の進み具合を確認しています。どの隊からも「有田に住んでいたけれど、知らなかった」「知っていたけれど、初めて行った場所だった」という感想が出ています。さらに「もっと地元の人に話を聞きたい」「自分たちが知ったこと、調べたことを子どもたちに伝えたい」という声も挙がっています。

有田町にはまだ、知られていないたくさんの宝があります。こうして隊員の方々と共に調べてきたことは、有田町の活性化につながる重要な一歩だと思います。

作業はまとめの段階に入りましたが、途中参加もまだ受け付けております。一緒に、一五〇年前の地図で新しい〝有田〟を発見しませんか。

（永井　都）

新指定 有田町の文化財

有田町教育委員会は平成23年4月26日付けで左記の文化財を指定しました。

重要文化財（歴史資料）
木造地蔵菩薩立像　一躯（有田町上幸平）

辻精磁社西側のトンバイ塀の露地を北に向かい、中樽川に架かるアーチ式石橋を渡ると、御堂が見えてきます。その中に台座、光背を含む総高2．61m、桧の寄木造の地蔵菩薩立像が安置されています。後背内面には「文政八年（一八二五）酉八月吉祥日　奉彩色京四條通東洞院南江入ル東角大仏師勝村忠圓弟子肥前佐嘉伊勢屋町内田敬作」と墨書されています。このことから、佐賀に内田敬作という仏師がおり、文政八年に彩色を行ったことがわかります。

文政十一年（一八二八）に有田皿山は未曽有の大火に見舞われ、町の殆どが焼失したといわれていますが、信者の一人がこの地蔵を背負って逃げ、難を逃れたとの言い伝えがあります。彩色の記録の上に「文政十一年八月九日、嵐の中、大火となり、徳三郎が駆け付けわが屋敷へ運んだ」ことが墨書され、言い伝えが裏付けられた歴史資料として貴重です。

後背内面部の墨書部分（赤外線画像）

一五〇年前の有田皿山ば　歩こう隊　外山編　活動報告

平成21年11月に、有田町歴史民俗資料館と特定非営利活動法人アリタ・ガイド・クラブとの協働で始まった「有田皿山ば　歩こう隊」ですが、現在「外山編」の活動を続けています。たくさんの方々に参加をいただき、先日隊員数が一〇〇名を突破いたしました。

この外山編も、実際に歩いて確認する調査はほぼ終了し、まとめの作業に入ってきたところです。

昨年の内山編と同様、5つの隊に分かれて調査を行いましたが、今回は各隊の活動内容を紹介したいと思います。

外尾山隊

調査報告地図。確認した道を色付けしている。緑の点線は現在の産業道路

外尾山隊は大串和夫隊長以下、隊員数15名で、地区を細かい所まで踏査しています。

例えば、丸尾中野耕地整理地区の奥に現在は3つのため池がありますが、古地図には記載がなく、この地は「ハタ＝畑」と書かれていて田が存在していません。明治～昭和にかけてこの畑を田にするときに作られたため池ではないかと考えています。古地図からこのようなことも読み取れます。

黒牟田・応法隊

黒牟田・応法隊は、大勢の地元の方が参加されて、大串忠弘隊長以下、隊員数36名で調査をしています。

この地区の調査は、まず黒牟田・応法の史跡リストを作り、それに沿って歩いていく中で古地図の道や水路、社寺、窯跡を確認するという方法をとりました。掛の谷窯跡や陶石を採掘した跡の東府屋谷、応法の金毘羅社など、毎回の調査地に山道が入るので、体力的にきつい時もありましたが、有田の窯業の歴史を深く感じさせられました。隊員からは「目から鱗の連続だ」との声があがりました。

応法の金毘羅社。切り立った山肌に社がある

広瀬山隊

広瀬山隊は、森日出生隊長以下、隊員15名。初めて参加する人たちが多い隊ですが、調査を楽しんでいる様子が伺えます。現在の地図と古地図を両方見比べながら、まず現地を歩くことから調査を開始しました。実際に歩いてみると、古地図とは随分変わっているはずの龍門ダム付近で、一部に古い道路の痕跡をみつけたことに皆驚いていました。

研究熱心な隊で、雨天の際も屋内で「広瀬向窯」発掘調査についての講話を資料館職員から受け、今後の踏査で確認したいと意気揚々でした。

また3月4日には、この「有田皿山ば　歩こう隊」の活動に対し、助成を行っている㈱花王から視察に来有され、他の隊からの参加者もあって大人数での調査となりました。

㈱花王の担当者と共に踏査する隊員

南川原山隊

西山峰次隊長以下、隊員19名で活動している南川原山隊は、他の隊と同じ一五〇年前の古地図がなく、地元にあった「文久の絵図」などを利用して調査することになりました。ほぼ毎週活動している熱心な

●新刊案内●

このたび、有田町教育委員会では下記の刊行物を発行しました。

〈有田町文化財マップ〉
配布場所：
有田町歴史民俗資料館
有田陶磁美術館
有田観光情報センター
有田町役場住民環境課
有田館
価格：無料

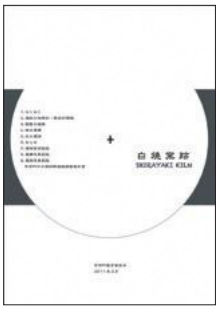
有田町内に所在する国、県、町指定及び国登録、町選定の文化財は 54 件におよびます。このほど、これらの文化財を一枚の地図で紹介した「有田町文化財マップ」を刊行しました。表には有田町の全体図と、町域を 5 地区に分け拡大した地図を配し、番号で文化財の位置を示しています。裏面では各地区ごとに文化財を写真付きで紹介しています。

この「有田町文化財マップ」を片手に、史跡巡りをしてはいかがでしょうか。新しい発見があるかもしれません。

小溝上窯跡は、南原地区に位置する、有田で最も早く成立した窯場跡の一つです。日本磁器はここで誕生した可能性も高く、1600 年代から 30 年代頃に操業した 5 基の登り窯跡が発見されています。発掘調査は、町道三代橋～宮ノ元線の建設に伴い、1993 年～ 96 年に実施しましたが、出土遺物が膨大なため、これまで正式な報告書の作成ができていませんでした。そのため、調査の中間報告として、今回概要報告書を刊行しました。

〈小溝上窯跡 発掘調査概要報告書〉
販売場所：
有田町歴史民俗資料館
価格：2,000 円
装丁：A4 サイズ・50 ページ

有田町幸平にある白焼窯跡の発掘調査報告書です。2002 年の発掘調査では新旧 2 基の登り窯が発見されています。幕末の貿易商であった田代紋左衛門ゆかりの窯であり、その姿は幕末の絵図「松浦郡有田郷図」にも描かれています。発見された登り窯は江戸時代中期以降に操業されたものですが、窯跡からは江戸前期の製品も数多く出土しており、有田の海外輸出時代に大きな役割を果たした窯の一つであったことがわかりました。



〈白焼窯跡〉
販売場所：
有田町歴史民俗資料館
価格：2,000 円
装丁：A4 サイズ・57 ページ

古文書教室研修旅行に行ってきました

説明を受ける受講生（柳川古文書館）

八重桜の蕾が膨らみはじめた、平成 23 年 4 月 13 日に古文書教室の研修旅行を開催しました。今回の研修地は柳川市で、柳川古文書館と御花史料館へ向かいました。

柳川古文書館では、学芸員の白石直樹さんより、常設展「保存のかたち～史料を守り、伝える～」を案内してもらい、江戸時代以降どのような形で史料が保存されてきたのかを紹介していただきました。史料の大部分は、意識的に保存されて現代に残ったもので、昔から史料を守るために大きな努力をはらってきたことを学びました。

御花史料館では、室長の植田かおりさんに庭園や建物、史料館内を解説していただきました。参加者のみなさんは「御花には来たことがあるけれど、こんなにしっかりと説明を受けたのは初めて」と嬉しそうに話していました。

有田への帰路の途中、以前古文書教室のテキストで使用した『佐嘉日記』に出てくる與止日女（よどひめ）神社と、隣接する真言宗御室派の実相院にも立ち寄ることができました。丁度、900 年以上の歴史をもつお経会も行われており、充実した旅行となりました。

季　刊　『皿　山』

通巻 90 号（平成 23 年 6 月 1 日）
編集・発行　有田町歴史民俗資料館

〒 844-0001 佐賀県西松浦郡有田町泉山 1 丁目 4-1
☎ 0955-43-2678　FAX0955-43-4185